

二つの聖書的時間観

— 詩編 90 編における神学的ダイバート —¹

ジョナサン・マゴネット

日原 広志 (訳)

この講演は、詩編90編に見られる時の本質に関する二つの対照的な観点を中心にいきます²。聖書の書き手たちが抽象的な言葉を扱うことは殆どありません。その代わりに、彼らの思想は、人間の諸状況や経験に基づいた物語や詩文の中に見出されます。この詩編で使われている言語に取り組むには、ヘブライ語の単語を少々学ぶ必要があるので、私はそれらを認識するのに役立つであろう〔ヘブライ語本文と英訳の単語にマーカーを塗った当日配布〕³プリントを用意しました。

分析に着手する前に、この詩編の全体像を把握しておくことが重要です。

1 訳注：これは2023年6月8日、西南コミュニティセンターホールで行われた西南学院大学学術研究所主催神学部共催の公開講演である。原題は、“Two Biblical Views of Time: A Theological Debate in Psalm 90”。

2 ヘブライ語の単語は性を持ち、男性か女性かのどちらかである。この区別は複数形において最も明瞭になる。すなわち、語末がイーム〔ם〕のものは一般に男性複数形であり、語末がオート〔ות〕のものは女性複数形である。この詩編が通常と異なるのは、使用されている時を表す二つのキーワード、「日」を意味する〔男性名詞〕ヨーム〔יום〕と「年」を意味する〔女性名詞〕シャーナー〔שנה〕が、〔名詞そのものの性に関わらず〕これら両方の形を用いつつ、本文中に現れることである。両語の男性複数形〔イーム型〕は、4〔שנים〕、9〔שנים וימים〕、12〔ימים〕、14〔ימים〕節に見られ、個人の〔体験する〕日々や歳月を示唆している。両語の語末が女性複数形〔オート型〕をとるのは10節〔שנותינו〕と15節〔שנות וימים〕に見られ、〔神によって〕測られ〔あてがわれ〕た日数または年数を示唆している。

3 訳注：以下、本文中の〔 〕は訳者による補足を表す。

詩編90編⁴

- 1 節 祈り。神の人モーセの詩。／
わが主よ、あなたは代々に我らの逃れ場。⁵
- 2 節 山々がまだ生まれず／
あなたが地と世界を生み出される前から／
とこしえ⁶からとこしえまであなたは神。
- 3 節 あなたは人を塵に帰らせる。／
あなたは言う。「人の子らよ、帰れ」と。⁷
- 4 節 まことに、あなたの目には／千年といえど
過ぎ去った一日のよう。／夜回りの一時にすぎない。
- 5 節 あなたは人を死の眠りに落とされる。／
人は朝に萌え出づる草のよう。
- 6 節 朝には咲き誇り、なお萌え出づるが／
夕べにはしおれ、枯れ果てる。
- 7 節 あなたの怒りに私たちは消え入り／
あなたの憤りに恐れおののく。
- 8 節 あなたは私たちの過ちを御前に／
隠れた行いを御顔の光にあらわにされる。
- 9 節 私たちの日々はあなたの激しい怒りに／ことごとく過ぎ去り／
私たちは吐息のように年月を終える。
- 10 節 私たちのよわいは七十年／
健やかであっても八十年。／
誇れるものは労苦と災い。／

4 訳注：以下、日本語聖書の引用は、特に断らないかぎり『聖書 聖書協会共同訳』からのものである。

5 訳注：「逃れ場」は講演者による。協会共同訳では「住まい」。後述される元のヘブライ語の語義的には協会共同訳の方がより適切である。しかし講演者は、最終節の別の名詞と連関させる必要上、「逃れ場」の類義語の中から当該の名詞が選択された可能性をみている。

6 訳注：「とこしえ」は講演者による。協会共同訳では「いにしえ」。

7 訳注：3 節は講演者による。協会共同訳はヘブライ語聖書本文の前半と後半を入れ替え、「人の子らよ、帰れ」とあなたは言い／人を塵に帰らせる」としている。

瞬く間に時は過ぎ去り、私たちは飛び去る。

- 11節 あなたの怒りの力を誰が知りえよう。／
あなたの激しい怒りはあなたへの畏れと対応しますか。⁸
- 12節 残りの日々を数えるすべを教え／
知恵ある心を私たちに与えてください
- 13節 主よ、帰って来ててください。いつまでなのですか。／
あなたの僕らを憐れんでください。
- 14節 朝には、あなたの忠実な愛⁹に満たされ／
すべての日々を楽しみ、喜ぶことができますように。
- 15節 あなたが私たちを苦しめた日々と／私たちが災いを見た歳月に応じて／
私たちを喜ばせてください。
- 16節 あなたの業があなたの僕らに／
輝きがその子らに現れますように。
- 17節 我らの神、わが主の好意¹⁰が／私たちの上にありますように。／
私たちの手の働きを／私たちの上に確かなものにしてください。／
私たちの手の働き、それを確かなものにしてください¹¹。

初めてこの詩編を読む人は、7-9節に描かれた神のイメージに戸惑うかも知れません。それは、あの「旧約聖書」の神についてしばしば繰り返される、激しい怒りに満ちた懲罰的な神という非難と一致しているように見えます。このイメージについては、後ほど、それがここ〔本詩編〕ではどのように利用されているのかを検証する際にまた触れることにします。しかし、著者をモーセに帰している見出しはひとまず置いておいて、冒頭の二節を検証することから始めましょう。

8 訳注：「あなたの激しい怒りはあなたへの畏れと対応しますか」は講演者による。協会共同訳は「あなたを畏れるほどに／その激しい怒りを知っていますか」。

9 訳注：「忠実な愛」は講演者による。協会共同訳では「慈しみ」。

10 訳注：「好意」は講演者による。協会共同訳では「麗しさ」とし、脚注に「別訳『好意』』としている。

11 訳注：「私たちの手の働き、それを確かなものにしてください」は講演者による。協会共同訳では「私たちの手の働きを力あるものにしてください」とし、脚注で「直訳『確かなものにしてください』』としている。

アドーナーイ マーオーン アッター ハーイーター ッラーヌー ベドー
ル ヴァードール

ベテレム ハーリーム ユッラードゥー

ヴァッテホーレール エレツ ヴェテーヴェール

ウーメーオーラーム アドオーラーム アッター エール

[אדני מעון אתה היית לנו בדר ודר]

בטרם הרים ילדו

ותחולל ארץ ותבל

[ומעולם עד־עולם אתה אל]

1 節 わが主よ、あなたは代々に我らの逃れ場。

2 節 山々がまだ生まれず／

あなたが地と世界を生み出される前から／

とこしえからとこしえまであなたは神。

まず注目すべきことは、詩編作者が「主」という語を用いて、神に直接語りかけていることです。残念ながら、私たちがヘブライ語に取り組みねばならない最初のポイントを迎えました。同じヘブライ語はこの詩編の最終17節にも一度出てきますが、そのことが既に、その〔術語の〕使用がこの詩編を囲い込む一種の括弧を形成していることを示唆しています。翻訳上は、13節にも「主」の語がありますが、実際には異なるヘブライ語が使用されており、これには若干の説明を要します。1節のヘブライ語は「アドーナーイ」[אדני]で、これは四つのヘブライ文字、アールフ、ダーレト、ヌン、ヨッドで構成され、全く書かれているとおりに発音されます。最初の三文字は「アードン」[אדון]の綴りで、それは世俗的な文脈では、権威があって、小文字の「n」で書かれる人間の「主 (lord)」または「主人」のような人物に用いられます。しかし、ここで使用されている「アドーナーイ」という〔人称接尾辞ヨッドの付いた〕文法的な形になると、それは神を表す諸々の名の一つであり、古代近東ではイスラエルによって独自に使用された名前です。しかし、より一般的には、13節に

実際にあるように、それ〔主という神名〕はヘブライ語聖書全体に亘って、別の四文字「ヨッド・ヘー・ワウ・ヘー」〔יהוה〕、いわゆる「テトラグラマトン」で以て書かれます。この形の神名は非常に神聖であるため、それが書かれている子音文字を使って発音すべきではないと考えられていました。代わりに、この形で書かれているときはいつでも、声に出して話す際には代用の発音として「アドナーイ」が用いられました¹²。このことは、ヘブライ語聖書で神を表すために使われる様々な名前、その場の文脈に応じてしばしば異なる目的を果たすということを示しています。ここにおいては、その名前〔アドナーイ〕の両方の書き方〔יהוהとאדני〕が使用されているため、それぞれがどのように用いられ、何がそれらを区別しているのかを理解する必要があります。2節の終わりには、神を表すまた別の名前「エール」〔אל〕も見られます。この語は、イスラエルでも周辺諸国でも、より一般的な神の概念を指すために使われています。それでは、この重要な冒頭の〔1-2〕節で何が生起しているのかを見てみましょう。

1節には、「わが主よ、あなたは代々に我らの逃れ場」とあります。イスラエルの逃れ場としての神について語ることで、ここではアドナーイという名前は、イスラエルと神の間の特別で深い関係と結びつけられています。この親密さは、「世代から世代へ〔代々に〕」という言い回しによってさらに強化されています。この定型句は、時の経過を表すために使われる聖書特有の用語です。これは「歴史」を表現する方法ですが、人間の経験と集合的な記憶という観点から表現されています。こうして、過去を振り返るとき、聖書〔の中で生きている人々〕は「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」の言い回しにおけ

12 テトラグラマトン〔יהוה〕の文字そのものを声に出して読まないように読み手に思い出させるために、「アドナーイ」〔אדני〕という単語の母音記号〔ִּוּוּ〕が、マソラ学者の伝統において覚書として子音文字ヨッド・ヘー・ワウ・ヘー〔יהוה〕の下に書かれた〔יהוה〕。このことが、この伝統〔ケティーヴ・ケレ〕に馴染みのない人々に、この母音記号〔ִּוּוּ〕を誤って〔本文の子音文字と〕結びつけ、神名を「エホバ」または「ジェホヴァ」と読ませるに至った。19世紀以降の聖書学者たちは、おそらくユダヤ教の伝統的な諸配慮〔神名への畏敬や反セム主義への懸念〕に鈍感であったのか、この四文字を「ヤハウェ」と読むことを選り取った。

るように、自分が知っていたであろう〔家族の〕三世代について語ることがあります。同様に、今日生きている人も、自分の子ども、孫、ひ孫を見るまで長生きするかもしれません。出エジプト記34章7節で使われている「三代、四代までも」という言い回しも、これで説明がつくものです。このように、冒頭の節は、人間の世代を超えて伝えられるイスラエルの歴史的経験という観点から時の経過を定義しているのです。さらに、それ〔1節後半〕は、庇護する力または逃れ場— それを意味するヘブライ語の用語は「マーオーン」〔מַאוֹן〕です—としての神との、その期間〔代々〕にわたる親密な関係を認めています。したがって、時の経過の中での、様々な人間の一生と、神との継続的關係についてのこの深い理解を表現するために、「アドナーイ」という名前が使われるのは適切なのです。

しかし、このような神に対する親近感とは対照的に、2節は想像力を劇的に飛躍させています。詩編作者は、「永遠から永遠まで」存在する神ならこのように眺め、経験するかもしれないものとして、時の本質を理解しようと試みています。神はこの世界そのものが創造される前から存在し、この世界が消滅した後もずっと存在し続けるでしょう。詩編作者は、時の本質に関して、人間の経験を反映するものと、神の経験を想像するものという、二つの視点を効果的に設定しています。これらの二つの認識を確立した上で、作者は、この詩編の前半で、「エール」と呼ばれる神なら人間存在の期間と本質をどのように見ているかを想像しようと試みます。

これら二節のヘブライ語本文には、私たちの注意を引くに値する美しい文学的対称性があります。それは、対照的な神名で以て始まり、終わる交差配列〔キアスムス〕構造です。神の親密な名前である「アドナーイ」がこの文学単元の最初の単語であり、歴史の外に立つ遠く離れた神「エール」が最後の単語です。同様にこの枠組みの中で、二つの時間認識、「世代から世代へ」と「永遠から永遠へ」が対応する位置に置かれ、均衡を保っています。

さて3-4節に目を転じると、これら二つの非常に異なる時間認識が、人間存在の期間と本質にどのように適用され得るかが分かってきます。

ターシェーヴ エノーシュ アド-ダッカー
 ヴァットーメル シューヴー ヴェネー-アーダーム
 キー エレフ シャーニーム ベエーネーハー
 ケヨーム エトモール キー ヤアヴォール
 ヴェアシュムーラー ヴァツラーイラー

[תשב אנוש עֲדֵדְכָא
 ותאמר שובו בני־אדם
 כי אֶלֶף שָׁנִים בְּעֵינֶיךָ
 כִּיּוֹם אֶתְמוּל כִּי יַעֲבֹר
]ואשמורה בלילה

- 3節 あなたは人を塵に帰らせる。／
 あなたは言う。「人の子らよ、帰れ」と。
- 4節 まことに、あなたの目には／
 千年といえど過ぎ去った一日のよう。／
 夜回りの一時にすぎない。

3節における人間のイメージは、創世記3章19節「あなたは塵だから、塵に帰る」でお馴染みでしょう。しかし創世記においては、「塵」にあたる言葉は「アーファール」[עפר]であり、これは「腐植土」、つまり生命が誕生する可能性のある有機物を意味すると理解するのが妥当でしょう。しかし、詩編作者はこの言葉を、そこから生命が生まれることはない碎石、粉、無機物を意味する「ダッカー」[דכא]に置き換えています。この節で詩編作者が喚起した視点は、私たち個々の人間の短い存在に過度の関心を持たないような神のものであることが明らかになります。この神にとって、千年は一日にも満たず、それどころか、そのうちのわずかな時間、単なる夜回りの一時としてしか経験されないようです。そのような神に対して、人間の人生のほんの一瞬が、一体どのような影響を与えることができるのでしょうか。

それにもかかわらず、詩編作者は3節の後半¹³に曖昧さの要素を組み込んでいます。それはヘブライ語の動詞「シュエヴ」[שוב]に関するものです。この動詞は、「振り返る」、「～の方を向く」、「引き返す」、「元に戻る」など、「転じること」にまつわる様々な意味で訳されています。前半部の「あなたは人を塵に帰らせる」は、単に個々の人間の人生の終わりを含意しています。しかし、「あなたは言う」で始まる節の後半部の神の言葉の引用は、接続詞「ワウ」[ו]によって導入されています。これは「そして」と読むことができるので、神の言葉は神の行動を単に補強したものとなり、「そしてあなたは言う、『自らの〔そこから取られた〕塵に戻れ』と」[と読めます]。しかし、この接続詞は逆接の「しかし」として読むこともでき、神の言葉が反対の意図を持っている可能性を示唆しています。こうなるとそれらは、それでもなお、神に「立ち返る」ことによって、別の次元の人生を手に入れることができるかもしれない、という招きにもなり得ます。この曖昧さは、節の後半の動詞シュエヴが、私たちが何に戻り、あるいは立ち返るのかを示す直接目的語を欠いていることでより強調されています。この二つの意味のうち、どちらがより有力なのかヒントを得るには、もっと先の13節で同じ動詞が戻ってくるまで待たねばならないでしょう。この不確かさは、聖書の詩編〔という書を読む際に、どの一編を読むのであれ、その一編〕の全体構成に常に注意を払う必要があることを思い出させるものでもあります。おそらく再び現れたときに解明をもたらしてくれる、キーワードの使用による終盤での解決を提供するまで、その詩編に漂い続けることになる緊張感を、著者は、冒頭で意図的に生み出している可能性があります。

詩編作者が持ち出してきた人間存在の短さと終わりらしきものを考えると、一体この人生には何の意味があるのでしょうか。詩編作者は、同じく探求的な調子で続けます。次の連で「朝に草のように繁茂すること」について繰り返される言い回しは、朝に新しい存在の誕生が約束されていることと、しかし夕方には衰え、枯れ果てて終わりを迎えることの両方を強調しています。朝のイメージを〔5-6節で〕持ち出し終わったからには、詩編作者は後〔14節〕で再びそれ〔朝のイメージ〕に戻ることになりそうです。

13 訳注：注7の通り、協会共同訳とは「前半／後半」が逆。

ゼラムターム シェーナー イフユー
 バッボーケル ケハツイール ヤハローフ
 バッボーケル ヤーツィーツ ヴェハーラーフ
 ラーエレヴ イエモーレール ヴェヤーヴェーシュ

[זרמתם שנה יהיו
 בבקר כחציר יחלף
 בבקר יציץ וחלף
 לערב ימולל ויבש]

- 5節 あなたは人を眠りに落とされる。/
 人は朝に萌え出づる草のよう。
 6節 朝には咲き誇り、なお萌え出づるが/
 夕べにはしおれ、枯れ果てる。

しかし、人間の儂さに対するこの穏やかな嘆きが続くのは、既に〔詩編全文引用直後に〕述べた衝撃的な攻撃です。それは、人間の過ちや墮落に対する侮蔑の表現に近い、痛烈な非難の形をとっています。神のかたちに人間を創造する際に神が抱いた期待に、人間が全く応えられないことに、神は激怒しているかのようです。

キーハーリーヌー ヴェアツペハー
 ウーヴァハマーテハー ニヴハールヌー
 シャッター アヴォーノーテーヌー レネグデハー
 アルメーヌー リムオール パーネーハー
 キー ホル-ヤーメーヌー パーヌー ヴェエヴラーテハー
 キッリーヌー シャーネーヌー ヘモ--ヘゲ

[כייכלינו באפך
 ובחמתך נבהלנו
 שת עונתינו לנגדך
 עלמנו למאור פניך
 כי כלימינו פנו בעברתך
 כלינו שנינו כמרהגה]

7 節 あなたの怒りに私たちは消え入り／
あなたの憤りに恐れおののく。

8 節 あなたは私たちの過ちを御前に／
隠れた行いを御顔の光にあらわにされる。

9 節 私たちの日々はあなたの激しい怒りに／ことごとく過ぎ去り／
私たちは吐息のように年月を終える。

7 節から 9 節の構造は、クライマックスのインパクトを強化しています。外側の枠にあたる 7 節と 9 節では、「あなたの怒り」、「あなたの憤り」、「あなたの激しい怒り」という 三つの同義語で以て神の不興の膨大さが強調されています。それらは 8 節を囲い込んでいます。しかし、囲い込まれた中にある神のイメージは、人々に恵みや同情の目を向ける優しい神ではありません。むしろ 8 節は、神のスポットライトが絶えず私たちの悪行に照準を合わせていると想像しています。しかもなお悪いことに、私たちの秘密の願望まで、すべてを見通す神の目にさらされてしまうのです。この偏執的な悪夢への下降から抜け出す道さえ、9 節でさらに私たちを待ち受ける激しい怒りによって封鎖されています。この監視から逃れる唯一の手段は、「ため息と共に年月を終える」死しかないように思われます。

この劇的で否定的な人間存在への見限りは、この詩編の前半のクライマックスとなっています。そこで著者は、人間が永遠の神にはどのように映っているのかを描こうとしました。人間に対する否定的な見方があまりにも意識的に過剰であるため、詩編作者はここで、同時代によく知られた一つの神学的態度を言い表していると思われます。しかし、これは、あらゆる種類の宗教的伝統の中で、自らを神に熱心であり、神の代弁者たり得るとみなす個人や集団の間ではよく見られるものです。とはいえ、この言葉は意図的に読者に衝撃を与えようとしている可能性があります。なぜなら、詩編作者は、今しも現れようとしている対照的な力強い声に向けて私たちが備えさせているからです。次の節は直ちに、この否定的な認識に対する実存的な抗議とみなされるものを紹介します。それはこう主張しています。もしある人々が信じるように、神が私たちに

そのように認識しているというなら、私たち自身は、彼らのようではない形で、人類の側から、自らの存在をどのように評価すればよいのだろうか。結局のところ、私たちも〔先祖同様に〕「世代から世代へ」の逃れ場として認識してきた神アドナーイに呼びかけるしかないのです。

イエメー-シェノーテーヌー ヴァーヘム シヴイーム シャーナー
 ヴェイム ヴィグヴーロート シェモーニーム シャーナー
 ヴェロフバーム アーマール ヴァーアーヴェン
 キーガーズ ヒーシュ ヴァンナーウファー

[ימי־שנותינו בהם שבעים שנה]
 ואם בגבורת שמונים שנה
 ורהבם עמל ואון
 כִּי־גז חיש ונעפה]

10節 私たちのよわいは七十年／
 健やかであっても八十年。／
 誇れるものは労苦と災い。／
 瞬く間に時は過ぎ去り、私たちは飛び去る。

余論 (EXCURSUS)

ここで一旦、詩編本文の分析を中断して、ここまでに取り上げた章句についてのラビのミドラーシーム、諸注解を総合的に紹介したいと思います。「ミドラーシュ」[מדרש] は、ヘブライ語の動詞「ダーラシュ」[דרש] に由来する言葉で、それはある本文を研究し、調査することを意味しますが、可能な限り様々なアプローチに対して常に開かれています。あるラビ的格言にあるように、「トラーには70の顔」(民数記ラッパ-13: 15-16)、つまり無限に可能な解釈があります。ミドラーシュは取り上げたヘブライ語の章句自体を深く掘り下げますが、インスピレーションを得るために、神からの教えの潜在源を含むとみなされる聖書の文献全体を活用します。同時に、ミドラーシュは、神の意志への洞察を共に探求している研究仲間との進行中の対話の一環として、同時代

の諸問題にも取り組んでいます。

この分析の出発点として再び創世記に戻りますが、今回扱うのは神が最初の人間であるアダムに与えた警告の箇所です。

神である主は、人に命じられた。「園のどの木からでも取って食べなさい。ただ、善悪の知識の木からは、取って食べてはいけない。なぜならあなたがそこから食べるまさにその日に、あなたは¹⁴必ず死ぬことになる。」(創世記2:16-17)

アダムとエヴァ二人ともが様々な理由であの禁断の木の実を食べ、甚大な結果をもたらしたことは分かっています。それでも私たちには一つの質問をする権利があります。果たして彼らは実際そうすることですぐに死んでしまったのでしょうか。明らかに、彼らは直ちには死にませんでした。このことは、私たちはその聖書本文を文字どおりに読むべきではなく、その隠喩的な意図を認識すべきであることを示唆しています。その実を食べた結果として、人間の世界に死が入り込み、寿命が制限されたのです。それゆえ、神は彼らをエデンの園から追放しました。なぜならそこには「命の木」があり、それを食べれば永遠に生きる者になってしまうからです。

これは、当該節を取り扱う合理的な方法です。しかし、ラビたちは常に、彼ら流の逐語的な問いを投げることに對して開かれていました。その節は、「あなたがそれを食べるまさにその日に」と明確に書かれているので、彼らはこのように問うことができたでしょう。「神はどのような“一日”を念頭に置いていたのか。人間にとっての一日なのか、それとも“神にとっての”一日なのか」と。もし後者であれば、私たちの詩編〔90編〕が、その〔神の〕一日が、人間で言えば、どれだけ続いたかの一例を示していることになります。

まことに、あなたの目には／千年といえど過ぎ去った一日のよう。／
夜回りの一時にすぎない。(詩編90:4)

14 訳注：「なぜならあなたがそこから食べるまさにその日に、あなたは」は講演者による。協会共同訳では「取って食べると」。

これなら、アダムがその後も生存し続けた理由を説明できます。しかし、もしその日の内に死ぬという神の脅しが本当なら、アダムは実際どのくらい生きたのかという疑問が湧いてきます。その答えは、創世記の別の章に見出せません。誰が誰を生んだかという系譜が含まれているため、私たちはつい読み飛ばしてしまいがちですが、ラビたちはそのようなことはいたしません。創世記5章5節には、そのような定式の最初の記述があり、以下の情報を以て結ばれています。

アダムが生きた生涯は、合わせて九百三十年であった。そして彼は死んだ。
(創世記5:5)

これによりラビたちは他の可能性もある中で、こう結論づけました。アダムは千年生きることもできたであろうに、あの詩編にあるように、残りの七十年を寛大にも他の人類に寄付したのだと。

私たちのよわいは七十年 (詩編90:10)

創世記と詩編をこうして関連付ける論理は、少なくとも聞き手を楽しませるものではありません。非常に真剣に、ラビ的精神は研究の楽しさに取り組んでいます。しかし、それはまた、アダムとエヴァが犯した不従順という重大行為に対しても、その出来事を巡る解釈の違いが人類と神との関係についての異なる神学的認識を決定づけた次第に対しても、私たちの注意を向けさせてきました。人間に対する神の憤りを言い表しているとして、詩編作者が引用した者たちによって、そのような否定的な見方が支持されていた可能性は十分にありそうです。しかし、このミドラーシュをたどる旅は、「善悪の知識」の木の描写で、「知る」というヘブライ語の動詞「ヤ-ダア」[יָדָע]とも引き合わせてくれました。その動詞はこの詩の後半の〔11, 12〕節でも登場します。

再び詩編 90編 に戻って

それでは、詩編そのものの分析に戻りましょう。10節から始まる視点と感情の激しさの変化は顕著です。そこに現れるのは、私たちに割り当てられた数年または数十年を生き延びるための日々の闘いにおける「人間を中心に考える」防御です。そこには、家族や共同体に対する、また価値観の保持に対する責任を含む、私たちが持っている人間の諸経験のネットワーク全体も暗黙のうちに含まれています。これらの70年あるいは80年は単なる「束の間」ではなく、各々が感情的、実際の要求を伴い、死の不可避性についても十分認識の上で営まれている一日一日から成っているのです。10節におけるその概観は、複数の質問〔11aと11b〕として枠づけられた応答の引き金となっています。

ミー・ヨーデーアァ オーズ アッペハー
ウーヘイルアーテハー エヴラーテハー

[מִי־יֹוֹדֵעַ עוֹ אַפַּיִךְ
וּכִי־רַאתְךָ עֲבַרְתְּךָ]

11節 あなたの怒りの力を誰が知りえよう。／

あなたの激しい怒りはあなたへの畏れと対応しますか。

「あなたの怒りの力を誰が知りえよう」という問いは、「誰がそんなことを知り得ようか」という単なる修辭的な発言かもしれませぬ。しかし、それはまた、自分たちは神の名において知っており、代弁することができると主張し、7-9節のような言葉で人々への非難を表明していた者たちへの、直接的な挑戦として提起された可能性もあります。おそらく詩編作者は、ヨブの友人たちのような、他人のあらゆる不幸を、あからさまな、あるいは隠された悪行に対する必然的な神罰と解釈する人々を念頭に置いているのでしょゆ。自称の、そして時には国に任命されることもある、宗教警察が抱く諸々の確信というものを反映しています。

その代わりに、この節の後半部分では、詩編作者の〔信じる〕神は、神との関係を保つ際の〔各人の〕畏怖と理解の程度によって、人々の行動を評価するというを示唆しています。つまりその人の視点で以て裁かれることが相応しいのであり、全ての人を、日々が「あなたの激しい怒りにことごとく過ぎ去る」罪人として、一律に見限るべきではないのです。この節の読み方において、私はラビ・ダヴィド・キムヒ（レダク）（1160-1235）の注解に従っています。彼はラビ、聖書注解者、哲学者、文法学者であり、自らをそれ以前の学術資料の編纂者および要約者とみなしていました。彼の業績は、欽定訳聖書の翻訳者たちから高く評価されました。詩編注解の中で、彼はこの節について次のように書いています。

誰かがあなた〔神〕に抱く畏敬の念に応じて、あなたの怒りも同様になることがわかる。すなわち、誰であれ、あなたへの畏敬の念が大きくなればなるほど、たとえその人が小さな罪を犯したとしても、あなたの怒りは大きくなるのである。まさにそういうわけで、私たちの教師であるモーセも、〔神が彼に約束の地に入ることはないと言われたとき〕自分自身について、「神はあなたがたの利益となるように私に怒りを示した」（申命記3:26）と言ったのである。〔これは〕〔私が犯した〕そのような小さな罪のことでなら、神は他の誰か〔がもし同じことをやったとしてもその人〕を罰したりはしなかつたらう〔という意味である〕。¹⁵〔幕屋に命じられていない規定外の火を持ち込んだ〕アロンの息子たちに関して神が「私に近づく者によって、私が聖なる者であることを示す」（レビ記10:3）と言われたのも同様の理由による。

この詩編の内部にあるもう一つのレベルのつながりも注目に値します。11節で誰が「アッペハー」〔אָפּהָ〕—あなたの「怒り」—と「エヴラーテハー」〔עֲבָרְתָהָ〕

15 訳注：講演者はキムヒの解釈を以下のように理解している。メリバで神の指示に反して岩を打つという小さな罪を犯したモーセに、約束の地に入れさせないという大きな罰を神が与えねばならなかった理由は、イスラエルに、自分たちの偉大な宗教指導者であっても法を超越してはいけないことを理解させるためであったと。

—あなたの「激しい怒り」—を知っていようと問うことによって、特に言及されている神の怒りを表す二つのキーワードは、この詩編の読者にはもうお馴染みの筈です。なぜなら、それらは7-9節で、私たちの全生涯は、私たちの罪を容赦なく探し求める神の監視の下で費やされるというあの断言の始め〔אִפְךָ〕と終わり〔עֲבַרְתָּךְ〕にあった、神の怒りを表す二つの重要な語だからです。ここでの全く同じ語の使用は、あの断言に対する一種の「尺には尺を」的な応答です。しかし、ただ〔論敵に〕反応するだけでは詩編作者にとって十分ではありません。次の節は、神との対話を〔自分から〕積極的に始めようとしています。

リムノート ヤーメーヌー ケーン ホーダア
ヴェナーヴィ レヴァヴ ホフマー

למנות ימינו כן הודע
וונבא לבב חכמה

12節 残りの日々を数えるすべを教え／
知恵ある心を私たちに与えてください。

この応答は、11節の問い「誰が知りえよう」で使われたのと同じ動詞「ヤーダア」「知る」を用い、それを次のような神への訴えに変えています。私たちがそのようなパートナーシップの中で独自の貢献をするのに必要な知恵を得ることができるように、あなたとどのように関わるのが最も良いのか「*知*るのを助け〔教え〕」てくださいと。この要求の背後には、アダムとエヴァが例の実を食べることによって得たあの知識についても言外にほめかされている可能性があります。あの知識は、今や、私たちの行動を決定する人間の現実の一部になっています。それは、得た経緯はともかく、今では大切にすべき神からの贈り物です。ですから、神の助けを借りて、それを最大限に活用する方法を学びましょう。

これまで、この詩編に明確な歴史的文脈はありませんでした。以下のことは、それが国全体もしくは、単に詩編作者の身近な環境と関心事という狭い範囲内で、起こりうる様々な問題の余波を反映している可能性を示唆しています。

シューヴァー アドーナーイ アドマーターイ
 ヴェヒンナーヘーム アルアヴァーデーハー

[שובה יהוה עד-מתי
 והנחם על-עבדיך]

13節 主よ、帰って来てください。いつまでなのですか。/
 あなたの僕らを憐れんでください。

神が明らかに不在であるように見えた期間に受けたダメージを回復するために、神に戻って来てほしいと訴える切迫感が伝わってきます。それは、3節ではその意味が、単に〔接続詞 *ワウ* を *and* と読んで〕「塵に戻る」なのか、それとも可能性として〔*but* と読んで〕「神に立ち返る」なのか、不明確であった動詞「シューヴ」「戻る／立ち返る」が再び現れることによって始められます。今やあの節におけるその動詞の意味は、遡及的に「神に立ち返る」の方に傾いています。なぜなら、ここで詩編作者は神に対して、私たちの許へ帰って来てくださいと訴えることができると感じているからです。神との対話が始まったのです。

しかし、ここで注目すべきは、主「アドーナーイ」が〔1、14節と異なり〕テトラグラマトンの形で書かれていることです。考えられる理由としては、「主よ、帰って来てください」という言い回し自体が、ヘブライ語聖書の他の箇所からの引用という可能性であり、しかもその出典を突き止めるのはそう難しくありません。同一の二単語から成る要求〔שובה יהוה〕が民数記10章36節に見出されます。それは、荒れ野を放浪するイスラエル人の旅において、契約の箱が次の場所に向けて出発する度にモーセが言った言葉〔10：35〕と対をなす非常に傑出した号令であり、契約の箱が新しい宿営地に留まる度になされたものです。

ウーヴェヌホー ヨーマル

シューヴァー アドーナーイ リヴェヴォート アルフェー イスラーエール

ובנחה יאמר

שובה יהוה רבבות אלפי ישראל

またとどまる度に、彼はこう言った。／「主よ、帰って来てください。／
幾千幾万のイスラエルの民のもとに。」(民数記10：36)

このような歴史の喚起は、幾世代の神〔である方〕への、民の人生の中に再び臨在するよにとの〔現下の〕訴えに良く適合するものでしょう。しかも、元の言葉〔10：36〕はモーセ自身によって語られています。彼こそ、神のご自身の民に対する怒りをなだめようと奮闘し、彼らのために嘆願した、荒れ野時代を通じて唯一の人物です。モーセはまた、民のために神とよりよく協働するために、動詞「ヤーダア」を用いつつ、神の道を「知る」方法を教示してくれるように求めた最初の人でもありました(出エジプト記33：13)。おそらく、こうした様々な反響が、この詩編自体の著者を、独自に「神の人」と冠して呼ばれるモーセに帰することに貢献したのでしょう。

詩編作者がこのような訴えをするに至った歴史的背景が何であれ、次の二節は、契約の中に含まれている民と神との間の相互関係を特徴づけるヘセド「忠実な愛」の約束を喚起します。また、〔5-6節で〕前述した草が生い茂る朝のイメージがここに再び現れますが、もはや喜びは私たちの全生涯続くという約束を伴っています。

サツヴェエーヌー ヴァッポーケル ハスデハー
ウーネランネナー ヴェニスメハー ベホル・ナーメーヌー
サンメハーヌー キーモート インニーターヌー
シェノート ラーイーヌー ラーアー

[שבענו בבקר חסדך
ונרננה ונשמחה בכל־ימינו
שמחנו כימות עניתנו
שנות ראינו רעה]

14節 朝には、あなたの忠実な愛に満たされ／

すべての日々を楽しみ、喜ぶことができますように。

15節 あなたが私たちを苦しめた日々と／私たちが災いを見た歳月に応じて／
私たちを喜ばせてください。

詩編は締め括りの解決に向けて進んでいます。出だして用いたイメージと語彙に立ち返ることによってそうしているのです。この詩編が冒頭の節で過去の諸世代を喚起したように、今度は未来の諸世代への希望に目を向けています。

イェーラーエ エル・アヴァーデーハー フォオレハー
ヴァハダーレハー アル・ベネーヘム

[ראה אל־עבדיך פעלך
והדרך עלי־בניהם]

16節 あなたの業があなたの僕らに／
輝きがその子らに現れますように。

結びの節では、詩編の始まりと同じ綴り [אדני] で、同じ神の名前アドーナーイが再び使われています。この節には、民と神との間で共有された協力と相互活動が生起することへの希望がまとめられています。

ヴィーヒー ノーアム アドーナーイ エローヘーヌー アーレーヌー
ウーマアセー ヤーデーヌー コーネナー アーレーヌー
ウーマアセー ヤーデーヌー コーネネーフー

[יהי נעם אדני אלהינו עלינו
ומעשה ידינו כוננה עלינו
ומעשה ידינו כוננה]

17節 我らの神、わが主の好意が／私たちの上にありますように。／
私たちの手の働きを／私たちの上に確かなものにしてください。／
私たちの手の働き、それを確かなものにしてください。

それにしても、詩編作者によって用いられた「我らの神、わが主の好意が／私たちの上にありますように」という表現は、一見するとかなり弱々しく、期待外れのようにさえ映ります。しかし、詩編作者は、注意深い読み手や聞き手のためになおちょっとしたサプライズを用意しているのです。「好意」と訳さ

れている語はノーアム〔נאם〕であり、ルツ記のナオミという名前からもお馴染みの単語です。しかし、この単語は、1節の「逃れ場」を表す単語マーオーン〔מֵאוֹן〕と全く同じ子音文字から成り、但し逆順に並んでいます。つまり、過去に私たちが、神から提供されたマーオーン「逃れ場」の中に住んでいたように、将来においては、神のノーアム「好意」が私たちの上に留まるように〔と訴えるのです〕。私は以前にはこの言葉遊びを、巧みではあるが弱く、〔語の選択が〕疑わしくさえある詩的な自惚れだと斬って捨てていました。しかし、やがて私はそれが、「永遠から永遠に」存在する遠い神を提唱する者〔論敵〕たちが、民の上に〔臨めばよいと〕望んだ「激しい怒り」と「怒り」に対する、適切なコントラストをなすものだと思なすようになりました。

最後の二度繰り返される訴えは、さらなる重みを持ちます。「確立する」と訳されている動詞、ヘブライ語の「クーン」〔כון〕は、創世記の〔これまで言及した2-3章ではなく〕創造物語そのものの語彙に属しています。そこで取られる形「ヴァイエヒー-ヘーン」〔וַיֵּיחֶן〕は、創造の各段階の結びを特徴づけるものであるため、慣習的に「するとそのようになった」と訳されています。しかし、この翻訳は、各段階がしっかりと「確立された」という、より深い意味を隠してしまっています。詩編の最後ではその訴えは二重構造になっています。すなわち、節の前半は、私たちの手のわざが「私たちのために」確立されることを求めています。それは、私たち自身の存命中に、成し遂げたことが正当に評価されるべきことを示唆しています。そして節の後半は、実際の仕事それ自体が、私たちの当面の生涯を超えて存続するべきという希望を表現しています。そのどちらも達成されたとき、私たち個々の人間の努力がある種の「永遠」体験に最も近づけるのです。詩編作者の見解では、このようにしてこそ、時を超えて存在する神が、時間を制限され、束縛されている死すべき被造物との関係性に入ることができるのです。

時についてのこの研究から詩編作者が導き出した教訓があるとすれば、それは、私たちは一日一日に対して相応しい重みと意義を与えるべきだということです。英語の慣用語で言えば、「毎日を大切に過ごす (make each day count)」となります。しかし、私たちだけではこれを行うことができません。詩編作者

にとって、神と私たち自身の人格的対話が必要なのは、神が私たちに、「自分の日々をしっかりと数えて、知恵の心を得ることができるように」教えてくれるからです。